

応用研究論文

哲学を通じた地域貢献活動の教育的意義について

秋田哲学塾の事例から

鈴木祐丞¹

¹ 秋田県立大学総合科学教育研究センター

本学総合科学教育研究センターでは、平成 28 年度から、地域貢献活動の一環として公開講座「秋田哲学塾」を主催している。平成 29 年度には、形式・内容を異にする哲学カフェを計四回開催した。哲学カフェには、公共性を涵養するという、また「考える種」をまくという教育的意義があり、秋田哲学塾の哲学カフェにおいてもそれらの意義は確かめられた。真実の探求を公共の場において行うとする哲学カフェにはジレンマが内在しているものの、その教育的意義は大きく、今後も秋田哲学塾では講演会・シンポジウムと並行して哲学カフェを開催していく予定である。

キーワード：秋田哲学塾，哲学カフェ，哲学

本学総合科学教育研究センターでは、平成 28 年度から、公開講座「秋田哲学塾」を主催している。教養科目を担当する総合科学教育研究センター所属の諸教員のうち、哲学を専門とする筆者が代表となり、哲学を通じた地域貢献活動の企画・運営を行っている。前稿では、そのうち平成 28 年度開講分を分析の対象に、アンケートの集計結果などを手がかりにして、秋田県における哲学のニーズと寄与に関して考察し、一定の肯定的な結論を導き出した¹。本稿では、平成 29 年度開講分を考察の俎上に載せ、哲学を通じた地域貢献活動にどのような教育的意義があるか考えてみたい。

以下では、まず、平成 29 年度の秋田哲学塾の活動内容を概説する。そのうえで、哲学カフェ（後述のように、平成 29 年度の秋田哲学塾の活動の中心は哲学カフェの開催であった）にどのような教育的意義がありうるか、一般論を踏まえ、秋田哲学塾という具体的な現場での実情を織り交ぜて考察する。最後に、秋田哲学塾の今後の展望を素描したい。

平成 29 年度秋田哲学塾について

平成 28 年度は秋田哲学塾を計五回開催したが、いずれも講演会・シンポジウム形式だった。哲学を通じた地域貢献活動の可能性を探り、秋田哲学塾の今後の方向性を模索するために、平成 29 年度は、意図的に平成 28 年度とは異なる形態で開催することとした。すなわち、平成 29 年度は、参加者が受動的になりがちな講演会・シンポジウムではなく、主として、参加者主体の対話の場である哲学カフェ²を開催することにした。

平成 29 年度に計四回開催した哲学カフェの、テーマ、日時、会場、進行役、参加者数について、表 1 「秋田哲学塾哲学カフェに関するデータ」にまとめた。以下ではそれぞれの回について補足的に説明する。

責任著者連絡先：鈴木祐丞 〒010-0195 秋田県秋田市下新城野字街道端西 241-438 公立大学法人秋田県立大学総合科学教育研究センター。E-mail: y-suzuki@akita-pu.ac.jp

表1 秋田哲学塾哲学カフェに関するデータ

	テーマ	日時	会場	進行役	参加者数(概算)
第一回	幸せとは何か	平成29年4月16日(日) 13時~15時	秋田市にぎわい交流館 AU まち発見・発信ステーション	カフェフィロ より派遣	36名
第二回	ふるさと	平成29年5月14日(日) 13時~15時	秋田市にぎわい交流館 AU まち発見・発信ステーション	カフェフィロ より派遣	24名
第三回	献血と 骨髄バンク	平成29年12月17日(日) 13時30分~15時30分	秋田市にぎわい交流館 AU まち発見・発信ステーション	鈴木祐丞	15名
第四回	「生きる」を 哲学する	平成30年3月4日(日) 14時~16時	本庫 Honco	鈴木祐丞	26名

第一回

筆者には哲学カフェの進行役の経験がなかったことから、カフェフィロ³より進行役を一名お招きした。

会場とした秋田市にぎわい交流館 AU まち発見・発信ステーションは、出入り自由のオープン・スペースである。周囲の雑音が入ってきやすいという悪条件にもかかわらずここを会場に選んだのは、できるだけ多くの人に、哲学(カフェ)に関心を寄せるきっかけを提供したかったからである。同じ理由から、事前の申し込みは不要とした。『朝日新聞』などで告知をしたもらった⁴ことや、「カフェフィロ」の知名度もおそらく手伝って、立ち見もでるほどの盛況であった。なお表1の「参加者数」の36名という数字は、アンケートを提出してくださった方の数であり、実際にその場に(短時間でも)居合わせた方の数はそれより10名程度多かったものと推測される(以上の諸点については第二回も同様である)。

進行役は基本的にホワイトボードを配置したステージを背にして立って話をし、参加者は(車座でなく)ステージを取り囲むように対座した。なお、筆者は資料の配布やマイクの受け渡しをしつつ、意見があまり出ない場合には発言するなどした。

進行役は「幸せとは何か」というテーマに関して、問いを狭く限定して考えを深めてゆくというよりも、テーマとゆるやかに関連するいろいろな問いを参加者に投げかけ、自由な雰囲気の中で多くの発言を引き出すことに(おそらく意識的に)努めていた。言い換えれば、進行役は、この哲学カフェを、「幸せとは何か」というテーマに関して、ときに意見をぶつ

け合わせながら共同して真実を探求する場というよりも、むしろ自他の多様な意見を確認しあう場と捉えていた。

結果として、「肉体的、精神的な痛みや恐れがないときに幸せ」「過去を振り返り、現在との差を認識することで幸せを感じられる」「幸福と成功は同じもの」といったさまざまな意見が飛び交うこととなった⁵。

第二回

第二回もひきつづきカフェフィロより進行役(第一回と同じ方)をお迎えした。会場、筆者の役割などは前回と同様であった。

進行役の発案で、今回は参加者の座り方を変え、参加者はステージに対座するのではなく、お互いに向き合う車座となった。進行役は輪になって座る参加者の周囲を立ち歩き、話をした。

進行役が座り方を変更した意図は、おそらく、参加者と進行役のあいだではなく、参加者のあいだで意見のやりとりをするよう、参加者に促すためであったと思われる。それゆえ当然のことながら、進行役の基本的なスタンスは第一回と同様であり、参加者どうしの自由で闊達な意見交換の促進であった。

その結果、「なぜ秋田の若者は都会に出るのか」「そもそも「ふるさと」は(なぜ)必要なのか」「秋田が人を引き戻すふるさとであるために、何が必要か」などのテーマをめぐって、参加者のあいだでさまざまな意見が飛び交った。

第三回

第三回からは筆者が進行役を務めることにした。

第三回の会場はやはり秋田市にぎわい交流館 AU まち発見・発信ステーションであり、今回は第一回と同様、参加者はステージを取り囲むような形で対座するようにした。また、これまでと同様、事前申し込みは不要とした。

「献血と骨髄バンク」をテーマに選んだ理由の一つは、今回の哲学カフェを、試験的に、第一回、第二回とは異なる場に設定してみたかったからである。すなわち、上述のように第一回、第二回の哲学カフェは、真実の探求の場というよりも意見交換の場であり、テーマをめぐるさまざまな意見が飛び交ったものの、真実を求めての意見のぶつかり合いはほぼ皆無であった。言い換えれば、表明された意見の正しさの吟味に踏み込むことは慎重に避けられ、「人それぞれ」という相対主義的な発言や思考がまかりとおっていた。そこで、第三回は、進行役を含めた参加者全員が真実を追求してゆく場にしようと考え、そこでそれがしやすいテーマ（「献血すべきか」、「骨髄バンクにドナー登録すべきか」）を選択した。

そのテーマについて考えるためには、「献血」また「骨髄バンク」について一定の基礎知識が必要であると思われたことから、本学のボランティアサークル学生赤十字奉仕団のメンバー二名と、秋田県赤十字血液センターの職員に、その解説をする講師役をお願いした。献血と骨髄バンクに関する基礎知識（必要性やリスクなど）を一時間程度のレクチャーにより得たうえで、「献血すべきか」、「骨髄バンクにドナー登録すべきか」というテーマをめぐる、進行役が議論を主導する形で、参加者全員でその答えを探し求めた。

その結果、第一回、第二回とはちがひ、議論のテーマが拡散して論点が見失われたり、相対主義的な意見交換に陥ることはなくなり、上述のテーマに関して真実を求めた意見の衝突が（進行役と参加者のあいだで、また参加者どうしのあいだで）たびたび生じた。だがその一方で、発言しやすい自由な雰囲気は失われ、その結果発言者や発言数が限定されてしまったように感じられた⁶。

第四回

第四回は会場を変え、秋田市にある会員制の私設図書館本庫 HonCo を使用させていただいた。本庫 HonCo 主催のイベント「本の力」というシリーズの一つという位置づけで、「「生きる」を哲学する」をテーマにした。会場がオープン・スペースではないことから、事前申し込み制とし、またこれまでとは異なり参加費（会場使用料・資料代・飲み物代として）を徴収した（一般 1,000 円、学生 500 円）。

「本の力」のシリーズということもあり、一冊の本をテキストとして設定することにした。20 世紀アメリカの小説家ウィリアム・サローヤン (William Saroyan) の『パパ・ユア クレイジー』(Papa, You're Crazy) (使用したのは伊丹十三訳の新潮文庫版) である。「生きる」にまつわるさまざまなことがらを、45 歳の父親と 10 歳の息子のあいだのやりとりを通じて描き出すこの小説を一章ずつ参加者全員で読み進め、「生きる」にまつわるテーマや問いを自由に立て、それらをめぐって参加者全員で対話するという形にした。進行役が正面・ホワイトボードを背にして立ち、参加者は進行役と対座した。

第三回までの反省から、この場を、基本的には気軽に自由な意見交換の場でありつつも、必要な局面では真実を求めての意見の衝突の場でもあるようにしたかったことから、哲学カフェ開始前に進行役がその旨を参加者に説明した。具体的には、基本的には思いついたことを自由に発言していただきたいが、真実を追求すべき問いが立てられたと判断される場面では、「人それぞれ」という相対主義的な発言は許容されず、その問いをめぐってこの場にいる全員が同等の立場で意見をぶつけ合わせて真実を追求したい、と説明した。

『パパ・ユア クレイジー』の内容に触発されて、「固定化された男性・女性の役割やイメージ」「都市型生活により失われたもの」「生きることの目的」といったテーマが参加者により立てられ、それらをめぐって多くの意見が飛び交った。そして、「都市型生活」についての意見交換の流れから、「現代の集約的畜産の是非（換言すれば、動物に（なぜ／どれくらい）配慮すべきか）」という、真実を追求すべき問いが立てられ、短時間ではあったものの、その問いを

めぐって参加者どうしが忌憚なく意見をぶつけ合う様子が見られた。

哲学カフェの教育的意義

フランスで誕生した哲学カフェ⁷が日本に導入されてからおよそ20年になる⁸。この20年のあいだに日本で哲学カフェに携わってきた人々の論考に目を通してみると、哲学カフェの意義、とくにその教育的意義として、少なくとも次の二つが認められているように思われる。

まず、哲学カフェは「市民社会を支える徳の涵養」につながりうる⁹。すなわち、哲学カフェは、「立場を異にする人々に対して自分の考えを述べ、そして相手の意見を聞く」という、公共的市民としての能力を改めて学びなおす場として機能しうるのであり¹⁰、言い換えれば、「私」の中に「私たち」という感覚を育む場となりうる¹¹ということである。哲学カフェにおいて、参加者は、あるテーマや問いについて、自分の考えを、他者の多様な考えの中で、他者とともに、彫琢してゆくことになる。この作業を通じて、参加者は、リバタリアニズムが想定するような「ばらばらに存在し、何のつながりももたない個人主義」「原子論的個人主義」¹²を脱し、他者とともに社会を作り上げてゆく個人という概念を培うことなるだろう。哲学カフェのアンケート¹³に、「関心のあるテーマについて他者と語り合うことは重要」(第二回, 60代男性)、「場所も世代も立場もちがう人と、同じテーマについて聞き、話すことができて、それこそ“幸せ”でした」(第一回, 40代男性)といったコメントがあったが、これらのコメントに、公共性の涵養という哲学カフェの教育的意義の一つが映し出されていると見ることができるだろう。

哲学カフェの教育的意義の二つ目は、哲学カフェの創始者とされるマルク・ソーテ (Marc Sautet) の次の言葉のうちに示されている。「カフェでの議論は哲学者にとって試練であるだけでなく、哲学そのものにとってのテストでもある。……「哲学する」とは、何よりもまず「耳を傾ける」ことだ。哲学者とはあらゆる質問に対して答えられる人物ではない。

すでに与えられた答え、主流の答え、あるいはそれに対抗する答えが哲学者を考え込ませるのだ」¹⁴。越門の言葉を借りて、ソーテの考えをわれわれの文脈に引き寄せて捉え直せば、「[ソーテは] 問いかけと吟味という固有の方法論を通じて、個人が自分の問題に向き合う手助けをすることで、哲学の社会的役割は存するとみている」¹⁵のである。

すなわち、哲学カフェにおいて、参加者は、哲学者(進行役)の導きのもとで、自分とは異なる他者の考えに触れさせられることになる。そして、あるテーマや問いについての自分のナイーブな見解に、あるいはきわめて常識的で当たり前と思われるような見解に、じつは議論の余地がなくはないのだということに気づかされうる。たとえば、普通、人は骨髄バンクにドナー登録しない。あるいは、普通、人はスーパーで安価なパック詰めの肉を購入してそれを食する。だがじつはそれは当然のことではないのではないか。哲学カフェという限られた時間の中で、このような問いに答えを導き出すことはきわめて困難ではあるが、少なくともそこに改めて考えるべき問いがあることに人は気づきうる。哲学カフェへの参加を通じて、いわば人々のうちに「考える種」がまかれるのである。その「考える種」が、人々をして、その後の生活の場において考え続けさせるのである。

最後に

「哲学カフェ」は、実はそもそもジレンマを抱えこんだ営みである。「哲学カフェ」という名のもとで「公共的な(カフェでの)対話」と「哲学」という相容れない二つの営みを同居させている」¹⁶のである¹⁷。すなわち、真実の探求を旨とする営みとして「哲学」は、ある問題についてじっくり腰を据えて(そして必要な場合には他者の意見に批判を加えて)考え抜くことを要求する一方、公共空間の中で他者とともにあることを旨とする「カフェ」は、短時間に多種多様な意見が飛び交うことを要求する。少数数とは言えない人々(10名~20名程度の場合が多い)が、きわめて限られた時間(二時間程度の場合が多い)、思いついたことを自由に発言しつつも、

限定されたテーマをめぐる（時に互いの意見を批判しあいながら）答えを探し求めようとするのは、もちろん不可能とまでは言えないが、きわめて困難な営みとなる。そこで、哲学カフェは、進行役の裁量次第で、「哲学」の側面に重点を置く場ともなりうるし、「カフェ」の側面に重点を置く場ともなりうる。前者の場合、その哲学カフェにおいては限定された問いをめぐる真実の追求の営みが生まれうる一方で、問いとは無関係な発言は許容されづらいゆえに、多種多様な意見に触れる機会は減ってしまいうる。後者の場合、その哲学カフェはゆるやかにつながりのある多種多様な意見が飛び交う場となりうる一方で、論点があちこちに転換してしまうので、特定の問いをめぐる真実の探求はきわめて困難となる。このような哲学カフェのジレンマは、先述のように、第一回から第四回の哲学カフェの中でも浮き彫りになったのだった。

どのような哲学カフェが最善であるかはもちろん一義的に決定できない。ただ、「哲学」と「カフェ」の二つの側面のバランスをとることは可能であると思われる。第四回哲学カフェ——ウィリアム・サローヤンの『パパ・ユーア クレイジー』を読み、「生きる」にまつわるテーマや問いを立て、自由に意見を交換しつつ、真実を追求すべき局面においては意見の衝突を避けずに対話を行う——は、比較的そのバランスをうまく保つことができたように感じている。

今後、秋田哲学塾では、講演会・シンポジウムと並行して、哲学カフェも開催していくつもりである。

文献

- 梶本直樹 (2014). 「哲学カフェにおける徳の涵養——喫茶 JUN (神戸) の場合」『哲学カフェのつくりかた』 3-15.
- 菊池理夫 (2007). 『日本を甦らせる政治思想 現代コミュニタリアニズム入門』. 講談社現代新書.
- 越門勝彦 (2014). 「哲学の共同実践としての対話——「哲学カフェ」の意義についての一考察——」『人文社会学論叢』 No. 23, 35-45.
- 森本誠一 (2015). 「哲学カフェを企てる、パブリック・エンゲージメントの試み——公的問題を引き受ける公共性の涵養を目指して」『Humanitas : 一般教育紀要』 40, 37-47.
- 三浦隆宏 (2014). 「哲学への弱い紐帯——中之島哲学コレッジでの哲学カフェ」『哲学カフェのつくりかた』 55-69.
- 三浦隆宏 (2015). 「「私たち」という感覚を育むために: 哲学カフェとシティズンシップ」『臨床哲学』 16, 3-22.
- マルク・ソーテ (堀内ゆかり訳) (1996). 『ソクラテスのカフェ』. 紀伊國屋書店.
- 鈴木祐丞 (2017). 「秋田県における哲学のニーズと寄与について 公開講座秋田哲学塾の開催を通じて」『秋田県立大学ウェブジャーナル A』 4, 63-70.
- 寺田俊郎 (2014). 「ガラパゴス化する「東京哲学カフェ」? ——哲学カフェの進化とは何か」『哲学カフェのつくりかた』 17-33.
- 鷺田清一 (監修) (2014). 『哲学カフェのつくりかた』. 大阪大学出版会.

注

- ¹ 鈴木 (2017).
- ² 「哲学カフェ」は多種多様であり、その定義は難しいが、「哲学カフェに共通するのは、進行役がいて、テーマを設け、その場にいる人たちが話して聞いて考えるというシンプルなつくり」である(鷺田(2014) xii).
- ³ 大阪大学臨床哲学研究室のメンバーを中心として 2005 年に設立された任意団体. 哲学カフェを中心に対話ワークショップを全国各地で展開しており、日本における哲学カフェの分野での草分け的存在である.
- ⁴ 第一回・第二回の哲学カフェについては、『朝日新聞』平成 29 年 4 月 11 日号 26 面、『週刊アキタ』平成 29 年 4 月 7 日号第 6 面、『広報あきた』平成 29 年 4 月 7 日号 20 頁で、事前に告知をしていただいた.
- ⁵ 『秋田さきがけ新報』平成 29 年 4 月 21 日号 27 面での、第一回哲学カフェ紹介の記事より.
- ⁶ 第三回哲学カフェの様子は、NHK 秋田放送局に

より取材を受け、本学で筆者が担当する授業「哲学・倫理学Ⅱ」の様子とともに、「考える種をまく——哲学者の挑戦」というタイトルの特集の一場面として、平成30年1月17日18時からのNHK「ニュースこまち」の中で放映された。

⁷ 哲学カフェ誕生の経緯は、越門（2014）35-40に詳しい。

⁸ 鷲田（2014）323。

⁹ 樫本（2014）15。ほかにも寺田（2014）33、森本（2015）46。

¹⁰ 三浦（2014）67。

¹¹ 三浦（2015）14。

¹² 菊池（2007）40。

¹³ 第一回と第二回のみ、アンケートを実施した。

¹⁴ ソーテ（1996）61-2。

¹⁵ 越門（2014）38。

¹⁶ 三浦（2015）7。

¹⁷ ソーテもこのことは認めているように思われる（ソーテ（1996）9-10）。

〔平成30年11月30日受付〕
〔平成30年12月12日受理〕

On the Educational Meaning of the Philosophical Contribution to Region From the Case of “Akita-tetsugaku-juku”

Yusuke Suzuki¹

¹ *Research and Education Center for Comprehensive Science, Akita Prefectural University*

The Research and Education Center for Comprehensive Science (RECCS) of Akita Prefectural University has held public lectures called “Akita-tetsugaku-juku” (Akita Philosophical School) as a regional contribution since the 2016 academic year. In the 2017 academic year, RECCS held café philosophique four times with various styles and contents. Café philosophique has various educational purposes: it cultivates communality and it sows the seeds of thinking. Although café philosophique poses a dilemma as it seeks the truth in a public place, the educational meanings it generates are profound. Therefore, Akita-tetsugaku-juku will hold café philosophique as well as lecture meetings and symposiums.

Keywords: Akita-tetsugaku-juku, café philosophique, philosophy